

伊勢物語初段と二段

——作者の批評の言葉について——

藤河家利昭

伊勢物語初段の「ついでおもしろきこともや思ひけん」と、二段の「いかが思ひけん」とは、ともに男主人公が女に歌を詠んで遣ったことに対する、作者の立場からの批評の言葉である。また、これらは両段自体の密接な関係のもとに対応している。未だ明らかになっているとは言い難いその解釈を通して、両段の物語の特色、成立裂機などを考えてみたい。

一、「ついでおもしろきこともや思ひけん」の解釈の検討

先ず初段を掲げる。^{注2}

昔^甲、男、初冠して、平城の京春日の里にしる由して、狩に往にけり。その里にいとなまめいたる女はらから住みけり。この男かいま見てけり。思はず古里にいとはしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男の著たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、しのお摺りの狩衣をなむ著たりける。

春日野の若紫の摺り衣

しのぶの乱れ限り知られず
となむ追いつぎて言ひやりける。ついでおもしろきこともや思ひけん、

陸奥のしのおもぢ摺り誰ゆゑに
乱れそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける。

「ついで」以下、終わりまでの部分は、作者の批評の言葉とされるが、同時にこの段を説明していく手掛りを与えていると思われる。特に「ついで」の語句が問題である。これには様々な解釈がある（塗籠本は「言ひつぎてやれりける、おもしろきこととや」とするが、意味の通じ易さをはかったものであろう）。これらは、主語が男になるか女になるかによって説が分かれるが、ここでは論の都合上、この批評の語句が「春日野の」の歌に関わるか、後の「陸奥の」の歌に関わるかによって分けてみる。

(1)「春日野の」の歌に関わるとする説

「ついで」は、多くの注釈書に「機会」とか「事の次第」とか訳

されているが、この歌を時と場合に即応して詠んで遣ったことをさしているであろう。これをもう少し具体的に説明して、勢語臆断は、「信夫摺に春日野の若紫とよみてかける業平の心を」と、歌を詠む手順と見、伊勢物語私記は、「狩り衣にしのぶずりの模様がある故に、ちやうど時と場合にふさはしい事と思つてやつたのであらう」と、歌を遣った契機と見ているようである。一応理になつてゐるが、作者の批評の言葉であるとしても、歌の直前に「しのお摺りの狩衣」を着ていたという叙述があるので必要であるとも考えられる。

一方、同じくこの歌を詠んで遣ったこととするのであるが、こう思つたのを女と見る説がある。鑑賞日本古典文学は「歌はともかく歌を贈る順序だてを相手もおもしろく思つたことだらう」とする。

これは、「ついで」以下の文があくまで男の側に立つて、その特異な詠歌の説明や、それに基づく男の行為の意義付けをしていることからすると妥当でないが、先のような難点を考えると、こう受け取られるのも一理あると言えよう。こういうところからこの歌を女の返歌とする説さえ出て来る。

この外、この歌のことではあるが、後の「陸奥の」の歌を踏まえて詠まれたことを言うとする説もある。

(2)「陸奥の」の歌に関わるとする説

男が「春日野の」の歌を詠んで寄越したので、女がそれをよいついでと思つて、すぐに返事をしようとしたことを言うとする説がある。これは「陸奥の」の歌を返歌に用いたとする(和歌知願集第三)それに類似するが、女がこの歌をそのまま返歌に用いようとしたことを言うとする説がある(伊勢物語直解・同題疑抄等)。さらに、男

が「若紫の」の歌を詠み、そのついでに同趣向のこの歌を詠じた(冷泉家流伊勢物語抄)、「若紫の」の歌を詠み終えた男が、もう一つこの歌を贈らうとしたことを言うとする説などがある。

以上の諸説の検討から、「ついで」の部分で、「春日野の」の歌を詠んで遣ったことについて男が思つたとする考え方がそのままには受け取られていなかったことが分かる。現代の多くの注釈書のように基本的にはこれに従うべきであるとしても、歌を詠む手順や歌を贈った契機を言うことに問題がある。そこで「春日野の」の歌の表現形式を考えてみたい。

二、「春日野の」の歌の表現形式

この歌の表現形式は特異である。それは物語の地の文に強く規制されるからである。この歌は、外に古今和歌六帖第五(「すりころも」、在中将集、業平集、新古今和歌集卷十一・恋一にあるが、ここでは在中将集と業平集をあげて比べてみよう。

狩にまかりて帰りけるに、しのお摺りの狩衣の端を切りて、歌を書きて女につかはしける

春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ限り知られず

(在中将集七七)

春日の里といふ所に行きたりしに、いとよき女のありしかば、しのお摺りの衣をやること

春日野の若紫の摺り衣しのぶの乱れ限り知られず

返し

陸奥のしのぶもち摺り誰ゆへに乱れせめにし我ならなくに

(業平集六一・一二)

在中將集では帰ってから歌を贈ったということもあって、上句は「しのぶ」を引き出す序詞で、心の乱れを訴える下句に中心があることは言うまでもない。業平集では上句に女を暗示していると見られるが、それが、「陸奥の」の歌が返歌として組み合わされることによって、「陸奥のしのぶち摺り」と対応するのでなお序詞と見なさう。

さて、物語においても、この歌の上句と下句とが一続きであることは、歌の前の「しのぶ摺りの狩衣」によって各々の語が結合されているので明らかである。そして上句が下句を引き出す序詞となっていることも自ずから示されていると言えよう。これは引き合いに出された「陸奥の」の歌にも序詞があることからそう言える。

しかし、上句は序詞の役割にのみとどまると言えるであろうか。作者の関心は、春日野に若紫が生えていたというようなこと、また男がその根から取った染料で摺った狩衣を着ていたというようなことには殆ど向けられていない。ここでは「春日野の若紫」が「その里に」住む「いとなまめいたる女はらから」を、男の受けた印象のままに表わすことが目的なのである。所謂有心の序が古今集に用いられるが、この場合暗示にとどめているとは考えられない。

初段の文章の構成を検討してみよう。これを大きく甲乙の二つの部分に分けることが出来る（前の引用文に私に記号を付した）。簡単に言うと、甲は、男が直面した女との関わりであり、乙は、それに男が歌でどう対処したかである。首尾の文は対応している。Aの「その里にいとなまめいたる女はらから住みけり」は歌の上句と対応する（「春日野の若紫」）。Bの「思はず古里にいとほしたなくてありければ、心地惑ひにけり」の傍線部は下句と対応する（「しのぶ

の乱れ」。このA B二文を結び付けるのが「この男かいま見てけり」という短文であるが、これはむしろAとBとの間に瞬時ではあるが間を置いて、それぞれを一応別の事として語ろうとする意識の表われと見る事が出来る。これを反映する歌も、上句が序詞として下句へ掛って行く、言い換えれば上句が下句に従属するのでなく、両者が対等の比重を持つと考えざるを得ない。つまり上句は単に暗示にとどまらず実質的な意味を持つのである。しかし、このままではこの歌の意味は分裂してしまうことになるだろう。

ここで歌に直接する「をいつきて」の意味が問題になる（二段の「帰り来て」と対応していると考えられる）。これはこの歌の特異な表現形式を支える条件の一つとなっていると思われるからである。これについても様々な解釈がなされている。簡単に整理してみよう。

(1) イ、男が女の帰った道を追い付かせて（使いの者にか）和歌
知願集

ロ、女が男のあとを追いついて（春日野の」の歌を女のものとする）
吉川氏の注6の論文

(2) イ、男が女の行った所をしたい尋ねて 伊勢物語肖聞抄等
ロ、女が業平の行く所を尋ねて（後の「陸奥の」の歌についてのことであるとする） 直解・闕疑抄

(3) すぐに、間を置かずに（追ひ付きて、追ひ継ぎて） 伊勢物

語愚見抄・勢語臆断等・現代の多くの注釈書

(4) その日を過ぎて後追ひ続^{注13}いて、後から引き続いて 伊勢物語
審註・私記

(5) 続け書きにして 森本茂氏著伊勢物語論及び伊勢物語全釈等^{注14}

(6) 姉妹の一人一人にあいついで 後藤利雄氏の論文^{注15}

(7) 大人びて、ませた口調で（老いつきて、老いづきて） 現代
のかんりの注釈書

これらの解の中には、末尾の「いちはやきみやび」と関連させて考
えたり (1)イ(3)⑤(6)、冒頭の「初冠して」と対応させて考えたり
(7) しているものが多い。そうするとこの語自体の意味が薄れた
り、また浮き上がったたりするのではなからうか。この語を生かすた
めに、「春日野の」の歌を女が贈ったことにしたり(1)ロ、同じく
女が「陸奥の」の歌を贈ることにしたり(2)ロ する考えもあるの
である。かと言って、歌を贈ったのを、その時より後の事とするの
はふさわしくない(2)イ(4)。

この語は、言うまでもなく歌を直接に受ける文脈にある。従って、
歌を贈るという行為の有りようを語るのであるが、それがこの歌の
特異な表現形式に由来していると考えることが出来る。先述した初
段の文章の構成から、歌の上句が春日野の美しい女きようだいを讃
えること、下句が自分の心の激しく乱れることを一応別の事として
表現しているとするならば、この時を逃し、この場を外してはその
二つが同時に意味を持つことはあり得ないのである。これがもし後
に贈ったようなものであれば、上句の現実感が薄れてしまえばかり
か、下句が中心になって女に恋心を訴える気持ちが強く出ることに
なるであらう。この歌はこの時と場に全てを負っていると言えよう。
「追ひつきて」を、すぐにとか立ちどころにとか訳すのもこういう
意味合いであるべきだろう。詠歌の早さを責めるためではない。こ
う考えると、「ついでタ」は「しのお摺りの狩り衣」を媒介として
本来別々の事がにわかに繋がりを持って来ること、それを歌の形式

に乗せて表現し得ることを意味していることになる。そして、この
時のみ序詞の機能が活用されるのである。しかし、歌の上句で他
を、下句で自分を表現しようとするには無理があると言わざるを
得ない。

ここで源順の「陸奥の」の歌がなぜ引かれたかが問題になる。従
来の主な説をあげてみる。

(1) 女が、「春日野の」の歌に対する返歌として用いた。 和歌知

顕集・肖聞抄・直解・闕疑抄・伊勢物語嬰児抄・勢語図説抄等^{注16}

(2) 「春日野の」の歌の本歌として引いた。 伊勢物語抄・同古意^{注17}

勢語諸註参解^{注18}・現代の幾つかの注釈書及び論

(3) 「春日野の」の歌の証歌として、または同趣向の歌として引い
た。 愚見抄・伊勢物語拾穂抄・清水文雄氏の論文^{注20}

(4) 「春日野の」の歌の注として引いた。 勢語臆断・審註・伊勢

物語新釈・同評釈

(1)の返歌説は、先述したように「追ひ付きて」の解釈から、或は(2)
の本歌説に対する疑問から考え付かれたのであらう。(2)については、
融が業平と同時代の人であることから、定家以来疑問が示されて来
た。この歌に続く「心ばへ」の字義にかなうのは、(3)の証歌説と(4)
の注歌説である。(3)のうち、清水氏は、愚見抄の証歌説を敷衍され
て、「ひたぶるな恋情の表象としての「心のみだれ」→「しのおもぢ
ずり」の連想過程は、当時としては、個人的なものというより、す
でに一般的なものであったことを、このこと（筆者注^{注21} 二首の歌が
偶然「よみ合せられ」たこと）は語っているとえよう」と説かれ
ている。しかし、ここでは歌の発想よりも形式の方が問題になって

いると思われるのである。(4)は「しのぶの乱れ」の注として引いたとするが、これは「しのぶもぢぢり」と「乱れ」との結び付きによって、更に「摺り衣」と「しのぶ」という新しい序詞の關係を作り出そうとした作者の意圖に沿うものであったかも知れない。また(4)のうち、窪田空穂氏は、狩衣に歌を書いて贈ったことによって、「この歌の懸想歌としての弱所である懸想」どころの無いところを、「若紫」と「しのぶの乱れ」によって、どうやら暗示することが可能になる」が、「それ程までにしても、物語作者は猶、懸想歌としての不備を感じたと見え」と説かれてゐる。この説の方向で考えてみる。融の歌は古今和歌集に四句「乱れむと思ふ」としてあり、これは言われるように作者が「乱れそめにし」と変えたのであろう。こうすることによって、自分の気持ちを表わすよりも、相手と自分の関わり方が強く示されることになる。これは、「春日野の」の歌において上句が他を、下句が目を表わすために、両者の脈絡をつける必要に迫られたからであると考えられる。こう見て来ると、末尾の「昔人は^{云々}」の文も再検討を要すると思われる。

三、初段末尾の一文

先ず「いちはやき」については、(1)すばやい、即座に、当意即妙の、という解と、(2)はげしい、乱暴な、熱烈な、という解とがある。大体、現代の注釈書に(2)を取るものが多い。しかし、臆断が「はなはたしき」としながら、その説明では「俄なる事にかゝる歌を^{云々}」とし、新釈も「おだやかならずこざかしき」とするように、厳密には分けられない。(1)のうち、愚見抄が「すぐれてすみやかなる心也」とした上で、「人の性の急におもひのどめぬ」ことをいうとしてい

るのが注目される。

次に「みやび」については、歌を詠んで贈った事を、その手段も含めて、「風流(事)」とするものが多い。一方、愚見抄は「色^(人を悦ばす)の事か」とし、直解・闕疑抄は「優艶に懸想する」事とする。少くとも直解・闕疑抄はそれが歌を通じてなされると考えていたと思われる。現代でも、片桐氏は「人間的な愛情として表現される『直なる心』^{注23}」と、その本質面を、渡辺実氏は「場面と状況に應じて、(中略)最も洗練された言語・行動をとること」と、現象面を捉えられてゐる。この場合、恋心を、歌を通して女に伝えることと考えてよいであらう。

それでは、「いちはやきみやび」はどういうことを表わしているのであろうか。「いちはやき」を(1)のように取る説では、恋歌を詠んで贈ることを、その手段も含めて、機敏にやり遂げたことと見てゐるようである。また(2)のように取る説では、熱情的に恋歌を詠んで贈ること、或はその手段に見られるように型破りな行動をとることと見てゐるようである。しかし、これらはこの歌の特異な表現形式―それはこの男の特異な人間像をも表わすことになる―を捉えていないと思われる。春日野の女きょうだいの美しさを讃えることと、それに対する自らの心の乱れという別の事を、「しのぶ摺りの狩衣」によってすかさず関連づけ、一つの歌に仕立てた。それは、普通の歌の体を踏み外したものであった。しかし、そこに自分の恋心を、歌という手段を通じて、その時と場にそうでしかあり得ないものとして相手に示そうとする男の姿が明確に捉えられるのである。

翻って、女の美しさを讃えることと、自分の心の乱れとをなぞ別

の事として表現しなければならぬのか。男の歌の上句に関わるとした、「その里にいとなまめいたる女はらから住みけり」から考えてみる。なぜ「女はらから」が登場するかについては、「男と姉妹との間のことが初段の問題なのではなく、姉妹に対する男の行動が初段の問題だった」という事情がある。しかし、「いとなまめいたる女はらから」は、もっと積極的に一つの課題を提示していると思われる。「なまめいたる」については、普通には、「みずみずしいにおいやかな美しさをとらえた表現」と説明されるが、愚見抄にはさらにはつきりと、真名本の「寂媚」をあげて、「女のかたちのこびたるをいへり」とし、勢語臆断には、遊仙窟に「婀娜」を「なまめく」と讀むとした上で、「媚ありてうるはしき人也」とする。現代でも、「媚態」、「性的な魅力ある若さの美・柔い女性的な感じ」と捉えられている。これから考えると、「いとなまめいたる女はらから」はそれ自体矛盾を孕む表現であり、これは言わば一つの難題が提示されたと見るべきであろう。伊勢物語の主人公の資格の一つとして、「隨時随意自己の感情を和歌に表現する能力」があげられているが、この難題に主人公が歌を通じてどういう対応を示すかはこの段の物語の動機があり、そこに主人公の特色が鮮明に表われるのである。その対応の仕方が、男の歌から引き出された「昔人は云々」の批評である。この「いちはやきみやび」もそれ自体矛盾を孕んだ表現である。「みやび」は、恋心を歌を通して伝えるという行為であった。これが「なまめいたる」という媚態と対応する。「みやび」、「なまめいたる」という接尾辞が意味するように、ここが都ならぬ地であったことによって、却って両者は緊密な繋がりを持つ。そして、成就しない恋の相手「女はらから」に対しては、「いちはやき」

という対応によって、姉妹の美しさを讃えることと、自分の心の乱れを同時に捉え、その時と場を措いては意味を持たないものとしたのである。

それに伴って、もう一つの課題と言うべきは、歌の下句に関わるとした、Bの「思はず古里にいはしたなくてありければ、心地感ひにけり」の傍線部である。これは恋心の機微を語るのではあるが、一方で、Aの意味を捉え直して、こういう条件のもとでのみ下に続く事があり得たことを語っている。それを、春日野の美しい姉妹を讃えることと自分の心の乱れを述べることをともかく関連づけ、「つい、でおもしろきこともや思ひけん」と捉え直す必要があったと思われる（両者の結び付く伏線は、既に冒頭文の「しる由して」にあると見られる）。のように、女の有りよう（それは男にとって極めて困難な状況である）に対して、歌で対応したところに男の独自の姿が行為として示されることになる。これは良い歌を詠めばいいというものではなく、そうでしかあり得ない必然性を持つ。そこに、歌の言葉に行動の裏付けを求めようとする作者の厳密な解釈がある。

四、「いかが思ひけん」

先ず、二段の全文を掲げる。

昔、男ありけり。奈良の京は離れ、この京は人の家まだ定まらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは、心なんまさりたりける。一人のみもあらざりけらし。それを、かのみめ男、うちもの語らひて、帰り来ていかが思ひけん、時は弥生のついたち、雨そは降

るにやりける、

起きもせず寝もせで夜を明かしては

春の物とてながめ暮らしつ

「いかか思ひけん」については、從來あまり問題にされていないが、二、三あげてみると次のような解釈がある。

(1)「通うてゐる男のある女に、一心に言ひ寄って、さうして逢つて、満足して帰って来て、やった歌といふ意味」(私記)

(2)「どんなに恋しく思つたのだからか(男の心中がつぎの歌で示される)」(日本古典文学全集)

(3)「女のひとりのみにもあらぬやうに見ゆれば、とやかく思ひみだれてにぞあらん、いかゞ思ひけん」と云ふ意にて、この詞は上のくだりにいへる事どもをうけ、下なる歌の心をもふかくして、いとおもしろし」(新釈)

(4)「遣りける」にかかるか。誠実な男なので、女の夫に気兼ねしてどんなに心を乱したことだろうか、の意か」(日本古典文学大系)

いずれも、歌を詠んで遣つた男の心情を考えているようである。また、それをこういう醜化表現にしたのは、事の性質上、作者がことさら筆を抑制した、或は男の思ひの深さ、複雑な心の中を読者に想像させようとしたと見ていゝのであろう。

これらは一応歌を詠んだ男の意図が作者には把握されていると考へていゝと思われるが、一方、それがどういふつもりか、作者にも掴みかねるといった体の言い方をしたとも考えられる。そして、これは歌の下句に関わっている。ここでも上句と下句の繋がり方が問題になるのである。歌の直前の文は、そのまま歌の上句から下句へ

の展開に対応する。「うちもの語らひて」という二重に醜化した言い廻しは、上句の屈折的な二重否定の表現と緊密に対応している。

従つて、上句は、極めて意に満たぬものでありながらともかく情を通じたこと(或はその心持ちとしてもよい)を語っていることになる。しかし、そうすると下句への続き方はどうなるであらうか。勢語臆断は、「はかなき短夜は、おくともなくぬるともなしに明て、帰り来て長き日の、雨さへそほふるに独なかめてくらしわふる心也」と要領よく説明する。が、上句を一夜のこととすると、下句は、幾ら三月初めの春雨という説明があつても、「春の物」としての「長雨」或は「眺め」には飛躍があり過ぎるだろう。そうかと言つて、歌を遣つたのは後日であるとする訳にはいかない。

ここで、関係が深いと見られる古今和歌集(巻第十三恋歌三・六一六番)の処理の仕方を見よう(なお、この歌は在中将集、業平集にもあるが、弥生の一雨の雨の降る日に女に遣つた由の詞書があるだけである)。

弥生の一日より、しのびに人にもら言ひて後に、雨のそ
ば降りけるによみてつかはしける 在原業平朝臣

起きもせず寝もせで夜を明かしては春の物とてながめ暮らしつて、秘かに女に言い寄つた後の、「輾転反側」を訳したと言われるように、作者の懊悩の甚しさを意味する。そうとすることによつて、下句において「春の物」としての「長雨」にちなむ「眺め」をして一日を暮らす外に自分を抑えようのない作者の思ひの深さが伝わって来ることになる。「弥生の一日より」という儿戯面な言い方は、結局下句の裏付けを求めたためであらう。こうして上句と下句は一

応過不足なく続くことになったのである。

これに対して二段はどうか。「婦り来ていかと思ひけん」は、後朝の文がすぐには遺れなかったということではなく、この続きにくい上句と下句の意味を切り離してしまつたと考えられる。勿論、形の上では同じ一日の事として密接な繋がりを持つのであるが。こうして、上句は、男が女との関わりにおいて直面した状況を、下句は、それにどう対処したかを語ることになる。そこでこの段の構成を見ると、甲が、主として女の居場所と人となり、乙が、その女と関わりを持った男が歌でどう対応したかを語っている。先ず女の居場所としての「西の京」は、初段に関連づけられながら、「古里」に對して、都が出来たばかりで人の住み定まらない所として對照的に設定される。これは、結果的には作爲的な時代設定になっているかも知れないが、恋物語の展開にふさわしい場所を求めたのであるとともに、A Bの、女の人となりを引き立てるためである。そして、やはりそれが初段と對照的な人物設定になっていることは言うまでもない。これについては、こういう女だから「まめ男」が心を惹かれるのも道理であるとか、こういう女を求めるところに男の理想を求める心が示されているとか説かれていくが従えない。また、こういった女の立場も、男の歌の情趣を一層深くするという捉え方も出来ない。

女が世の女よりも秀れ、物の情趣を深く解することが出来、その上、夫もあるらしいとなると、男はどう自分の思いを伝え、また自分の身を処したらよいであろうか。趣味の深さに対しては「春の物」としての「眺め」をし、夫があるらしいことには「眺め」をして思案に日を暮らしたというのである（ここでは、本来この歌の表に立

つべき「長雨」は背後の情景としてあるだけである。これは初段の「春日野の若紫」がそれ自体としては殆ど意味を持たないのと同様である）。そして、こういう女の有りように生真面目に対応しようとする点を、少々皮肉をこめて「かのみめ男」と呼んだのであろう。初段の「いちはやきみやび」をあざやかにやってのける男に對して、これは時間をかけて能う限り事に処して行こうとする実直な男である（その「まめ男」ぶりの一端は、女の「心」に對して「春の物」と応ずるところにも表われているかも知れない。「春物」という漢語に對して「春心」もある。「いかが思ひけん」は、そういう「まめ男」の独自の対応の仕方が歌の下句に示されることを予告したのである。

五、初段と二段の成立契機

さて、初段、二段の歌の扱い方を見ると、一首の歌の中に思いがけない出来事の展開を見ようとしたり、主人公の行動の顛末を見ようとしたりしている。このために上句と下句の意味の繋がりを一応断ち、両者に対等の比重を持たせる必要があった。これは漢詩の形式に由来すると言えよう。しかし、二段の業平の歌は、それ自体、既に上句と下句が漢詩的な構成をとっているのである。

そして、初段では上句の序詞に、女きょうだいの美しさを讃えるという実質的な意味を持たせ、さらにその機能を活用して、本来意味の繋がらない下句を一首の中に結合し得たのである。二段では下句の懸詞自体が男の行動の独自性を語る要になっている。反面、本来それらが持っていた自然的な意味は殆ど無視されたり、背景におしやられていると言えよう。このように変則的ではあるが、和歌の

持つ序詞や懸詞の機能が、両段の物語の形成に大きく関わっていると考えられる。特に二段の業平の歌は、漢詩的な構成とともに、漢語の和訳と考えられる「春の物」と和語の「ながめ」という懸詞との結合によって、余情を深くしているのであり、そこに作者は物語的関心をそそられたのであろう。

以上のように、初段と二段は、女の有りように対する男の対応の仕方語る（それは難題に歌で答える形をとってよい）が、歌の序詞や懸詞の機能を活用することによって、主人公の独自性を引き出していると言える。「ついでおもしろきこともや思ひけん」、「いかか思ひけん」は、両段の物語の成立契機に触れる言葉であったと考えられる。そして、このように和歌の表現の特性を生かそうとすることは、伊勢物語の自ずからの方向を示すものとなっているであろう。

なお、両段には内容と形式に遊仙窟の影響があると思われるが、ここでは触れ得なかった。

- 注 1 石田穰二氏「伊勢物語の初段と二段」文学論漢第48号（昭和四十八年十二月）
- 2 日本古典文学大系に拠った。なお、表記は、私に改めたところもある。また、記号も付した。以下の本文の引用も同じ。
- 3 契沖全集第九卷九頁。以下の引用も同書による。
- 4 折口信夫全集第十卷（中公文庫）四二頁
- 5 片桐洋一氏編同書第五卷「伊勢物語大和物語」四〇頁
- 6 吉川理吉氏「うひかうぶりして」その他——伊勢物語初段の解——「国語国文第32巻第1号（昭和三十八年一月）」
- 7 伊勢物語拾穂抄・同古意

- 8 片桐洋一氏著「伊勢物語の研究（資料篇）」による。闕疑抄、伊勢物語抄も同じ。以下、引用する場合も同書による。
- 9 宋刊国文古註釈大系第八巻による。
- 10 高橋文二氏「伊勢物語小見」国語国文第40巻第1号（昭和四十六年一月）
- 11 私家集大成による。業平集も同じ。
- 12 片桐氏の注8の書による。愚見抄も同じ。以下、引用する場合も同書による。
- 13 注9に同じ。
- 14 この外、伊藤颯夫氏「伊勢物語初段における解釈上の疑義」『平安朝文学研究作家と作品』所収昭和四十六年三月刊がある。
- 15 「伊勢物語初段の解釈」（国文学第4巻第8号昭和三十四年六月）
- 16 宋刊国文古註釈大系第九巻による。
- 17 国文学註釈叢書三による。拾穂抄、伊勢物語新釈も同じ。以下、引用する場合も同書による。
- 18 考證伊勢物語詳解の引用による。
- 19 注9に同じ。
- 20 「いちはやきみやび」（源氏物語その文芸的形成）所収昭和五十二年九月刊
- 21 注20の書一二頁
- 22 伊勢物語評釈三〇～一頁
- 23 「伊勢物語根本——その虚構と方法——」（源氏物語とその周辺）所収二八頁昭和四十六年六月刊
- 24 新潮日本古典集成伊勢物語解説一四二頁昭和五十一年七月刊
- 25 例えは注22の書
- 26 例えは注5・23の書及び論文
- 27 注24の書一四二頁
- 28 森野宗明氏著講談社文庫伊勢物語九五頁昭和四十七年八月

- 刊
29 森岡常夫氏「なまめかしとえん」〔源氏物語の研究〕所収
二一六頁昭和四十二年十一月刊
30 犬塚旦氏「なまめかし考」〔王朝美的語詞の研究〕所収一
〇七頁昭和四十八年九月刊
31 上坂信男氏「歌物語序説——伊勢物語をめぐって——」
〔物語序説〕所収一三一頁昭和四十二年四月刊
32 日本古典文学大系に拠った。なお、表記は私に改めた。

昭和五十五年度 日本文学会講演会

期 日 昭和五十五年十月十五日

場 所 本学別館四〇一教室

内 容 「美とは何か」

——辻邦生の初期作品を通して——

文芸評論家 杉本春生氏